

江戸前の釣り復活めざしてマコガレイ放流

東京湾遊漁船協組が羽田沖で6回目

東京湾遊漁船業協同組合（飯島正宏理事長）は、マコガレイ稚魚の放流を去る7月26日、東京湾・羽田沖の浅場で実施し、1万尾を放流した。

東京湾遊漁船協組では、長年カサゴやメバルの放流を実施してきているが、カレイは2017年4月に初めて稚魚1万尾を羽田沖に放流して以来、毎年、放流事業の一環として、このカレイの放流を実施しており、今回で6回目となる。

今回、東京都大田区にある船宿「まる八」船着場にトラックで運ばれてきたカレイの稚魚は、今年1月に山口県の下松市栽培漁業センターで生産されたもので、これを同協組が（公財）神奈川県栽培漁業協会を通じて入手した。今回のカレイの体長は3・5〜6センチ。

現在コロナ禍の第7波が全国で急速に感染拡大を続けている状況で更に当日はあいにくの雨模様となった。そうした中、

稚魚は同組合の青年部を中心とした組合員17名によりトラックからバケツリレーにて放流船に積み込み、午前9時すぎに出船。15分ほどで羽田沖の浅場に運び、次々無事に放流を実施した。

東京湾遊漁船協組では「江戸前の釣り」復活をめざし、このカレイ放流について概ね次のとおり説明している。

東京湾のマコガレイは江戸前のカレイとして、古くから人気があり、冬

場のカレイ釣りは、風物詩でもあったが、釣場が次々埋め立てられ、産卵場所も少なくなり、近年絶対数が激減。10年ほど前から乗合船の出船も激減してしまった。

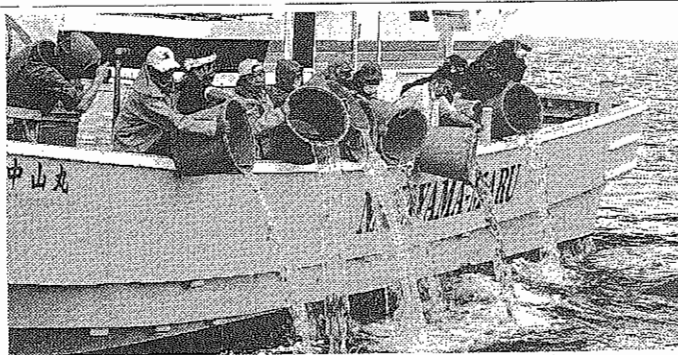
同協組では、カレイに限らずハゼ、シロギス、アナゴなど江戸前の釣りの復活をめざして、長年

活動を展開してきており、そうした魚種の放流も課題となつているが、江戸前を代表する魚種の中で種苗が入手できるのは今のところカレイだけで、そのカレイの種苗確保についても毎年苦労している状況。これに関して、飯島正宏理事長は「マコガレイは東京湾で激減した魚種の代表格。組合としては今後も種苗が手に入れば放流を毎年続けて

いきたい」としている。今回、放流したカレイの稚魚は3・5〜6センチ。成長はゆっくりで20センチを

超えるまでには3年ほどかかる。同協組による最初の放流から5年が経過しており、そろそろ釣り

「ごろに育ったカレイもいるはずなのだが」と期待している。詳細は東京湾遊漁船業協同組合へ。



東京湾遊漁船協組が江戸前の釣り復活めざし羽田沖でマコガレイを放流、参加した組合員たち